

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第35号
平成20年7月
生涯学習課文化財係



“保育”のはじまり ～昭和の戦争と農繁期託児所～

展示期間

平成20年7月2日(水)～9月28日(日)

※図書館事業「戦争と平和展」の際は、パネル展示のみとなります。

今では珍しくない保育所・育児施設ですが、その普及は米増産が奨励された十五年戦争と深い関係がありました。今回の展示では、“託児所”“保育”をキーワードに昭和の戦争と当時の市域の様子を振り返ります。

※十五年戦争…満州事変から、昭和20(1945)年のポツダム宣言受諾までの約15年にわたる戦争の総称

“託児所”の歴史

保育施設の始まりは、明治20(1887)年代にさかのぼることができます。当初、保育施設は託児所と称するところが多く、工場や炭鉱などで働く女性のためにつくられた企業側の託児所のほか、地域の篤志家が貧困家庭の子を対象とする託児所がありました。

地域産業の繁忙期に託児所を設けようとする動きは、すでに大正の末ごろからはじまっていますが、昭和11(1936)年、国の調査会が地域の季節託児所を「農村児童の健康保護」と「農家経済への寄与」を目的とする施設として位置づけて以来、全国各地に広がりました。



勝龍寺の託児所 ～臨時託児所から銃後の農繁期託児所へ

昭和10(1935)年、大規模な洪水により壊滅的な被害を受けた勝龍寺地区では、乳幼児の保健衛生と家庭の復旧作業を援助する意味で、京都府社会課によって恵解山勝龍寺に臨時託児所が開かれました。市域最初の託児所です。西本願寺社会部より保母の派遣援助を受けていたほか、地域の国防婦人会などに所属する女性たちが子どもたちの面倒をみていました。60～70名の子どもたちが預けられていたといえます。



勝龍寺の託児所(昭和10年)



神足月報 神足尋常小学校発行
(昭和14年7月の記事より)

『神足月報』で“託児所”についてみていくと、昭和10年8月、小畑川の大洪水により勝龍寺に設置された託児所について、地域女性らの働きとともに、子どもたちのかわいらしい姿が報道されています。ところが、日中戦争が本格化した昭和14年には、農村の銃後を守る女性たちを讃える象徴として紹介されています。

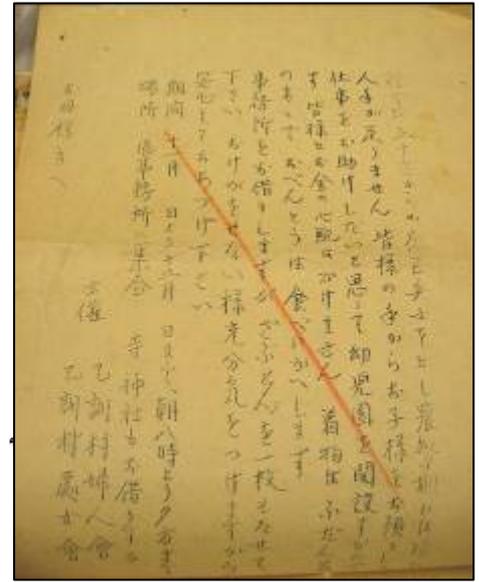


戦時下の農繁期託児所

十五年戦争、特に日中戦争(昭和 12 年～)以降、不足する男子に代わる労働力として、食糧や兵器の増産の担い手として女子が勤労働員の対象となったことにより、政府は託児所を生めよ殖やせよの政策実行の重要な手段として捉えるようになりました。

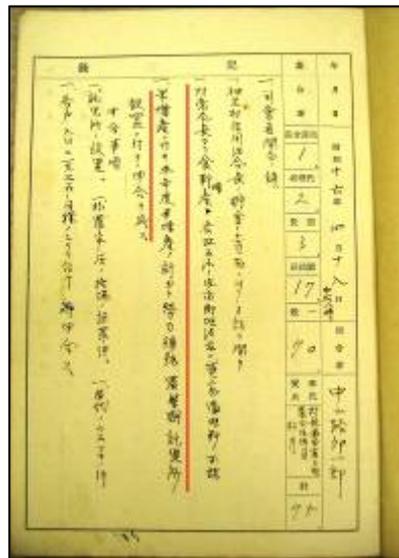
市域でも、農繁期に限られますが、共同保育が活発になります。当時、市域にどれだけの託児所があったのかは不明ですが、昭和 10(1935)年の勝竜寺地区を筆頭に、各地の寺社、区事務所などで開かれ、特に非農家の女性たちがその運営を支えました。

昭和 18 年には、新神足村の託児所が「農繁期の乳幼児のため、十八日から村内の非農家婦人の応援を得て、各区単位に共同託児所を夫々開設、食糧増産戦の能率向上を図っている」と報じられています(『京都新聞』昭和 18 年 6 月 20 日付)。



農繁期幼児園案内(今里区有文書)
昭和 18 年(推定)

村内の女性団体が、農繁期の農家女性の仕事を助けるためとして「幼児園」を開設し、入園を呼びかけています。



開田部落会会議録
(開田区有文書)
昭和 16～20 年

傍線箇所には、米増産の労力補強のために託児所を設置することを申し合わせる、とあります。



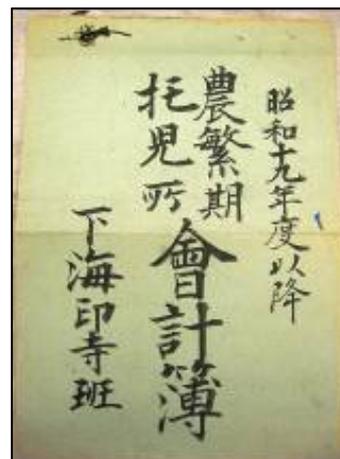
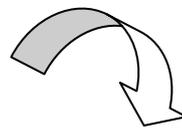
戦時保育所日記(開田区有文書)
昭和 16・19 年

預けられた子どもたちの名前と、保母を務めた女性の名前などが記されています。



下海印寺集落内にある阿弥陀寺
(平成 20 年 4 月撮影)

下海印寺地区の託児所は、昭和 19(1944)年から阿弥陀寺に開設され、20 名程の子どもたちが預けられていました。



農繁期託児所會計簿
(下海印寺区有文書)

託児所は、京都府および海印寺村からの補助金、地域住民の寄付によって、運営されていました。